東日本大震災医療支援記録

医療法人越南会　五日町病院
亀　田　　宏

１　チーム編成について

県医師会からの要請もあり、自己完結型を念頭におき、医師の他、薬剤師の坂爪頼雄、看護師の田村一貴、事務の西野正人の４人とした。２泊３日の山行きを想定した。

２　移動について

六日町から石巻往復は当法人のセレナ８人乗りのバンを使用、高速道路に一部段差が生じていたが、支障なし。朝、５時30分出発11時30分活動拠点の診療所のある門脇中学避難所に到着。道路状況、所要時間等は想定通り。運転は３人で交代、疲れは適当、一人では無理。往復、現地の移動を含め約900キロを走行。必要携行品から、乗用車は、不可であったと判断した。

現地では、宿舎のホテル、石巻日赤、診療担当の避難所の門脇中学の3地点間の朝、昼、夕の車での移動がミーティング、報告の為必須。しかし、道路の渋滞のため時間が読めず、相当余裕を見ていたのに、遅刻しそうになった。渋滞を想定しておく事、現地に詳しい人からの抜け道の確認の必要がある。

３　現地の活動方針について（石巻日赤にて）

当チームの活動は震災後約2ヶ月を経た５月22日から24日。市内の医療機関は診療再開中なるも道半ば。

今後は、活動を行っている医療チームのライン数を減らし、救護活動を行うエリアをまとめ、避難所の巡回頻度を減らし、診療再開している地元医療機関へのソフトランディングする方針の説明を受ける。背景に避難所の撤収がある。

４　救護所の診療について（門脇中学にて）

５月22日午後2時先任の新潟市医師会チームから鍵を受け取り、診療開始。避難所の人口は、371名。呼吸器症状２名、消化器症状２名、高血圧症１名。２名に院外処方箋を発行。門脇中学は電気、上下水道も通じており、清掃も行き届いていて、衛生状態は良好と判断した。24日午前中迄の担当期間中に20名に診療、院外処方箋の発行を行った。皆さんが閉塞感、めどの無い避難に元気を失っている様子であった。呼吸器症状を訴える受診者が多く、重症度の判断にSPO2のチェックが役立った。

活動上４人は不可欠。看護師はもとより、特に薬剤師は、診療所内、院外処方箋の確認、調整に大活躍した。事務方も細やかな連絡、調整に重要不可欠。

５　身の安全について

・マスク

建物内はマスク無しでも良いと判断したが、異論がありそう。N95のマスクをきちんと密着しての仕事は無理？

被災現場の視察で、腐敗臭、晴天時のほこりには、閉口したが日和山公園からの俯瞰した光景、北上川東地区の湊地区の光景には息をのんだ。

・ラジオ

診療中も移動中も余震等の情報入手の為、ラジオをつけていた。幸いにも期間中に大きな余震はなかったが、ラジオは必需品。

・体調の維持

二泊とも、ホテル泊。ホテルの確保については後から聞いた話では、石巻赤十字コーディネーターの石井先生の判断、ご努力によるところによる。食事についても問題なし。アスベストの吸入のリスクについては、埒外とした。

帰路松島湾に寄り破壊を免れた綺麗な景観を堪能、牛たんを食べ、一刻を過ごした。４人共松島は初めてであった。これは必要なプロセスと考え予定の行動。同じ事を他県のメンバーがしていた。

６　ミーティングについて

朝８時30分石巻中学校でエリアミーティング、夜６時石巻赤十字病院の幹事ミーティングに４人で出席した。患者さんの動向、対応、についての情報交換があり役に立った。私たちチームの孤立感も救われた。

特に、石巻赤十字のミーティングでは、本部への質問、重箱の隅をつつく、繰り返しの質問に、石巻赤十字の石井コーディネーターが切れずに投げずに対応されていて感服した。

コーディネーターの役割、存在、重要性を学習する大事な場面を経験した。

７　感想

百聞は一見に如かず。